

## イエズス会教育機関の設立について

成田勝

## 一 日本布教長カブラル神父の方針

フランシスコ・カブラル神父は一五七〇(元龜元)年六月に來日し、コスメ・デ・トルレス神父にかわって日本布教長の職についた。

同神父は來日から一年余りののち、一五七一年九月五日付でイエズス会総会長に手紙を送り、布教方針、修道生活、コレジオのことについてふれている。その内容を要約するとつぎのとおりである。

一 日本では封建領主以上にすぐれた使徒はいない。領主さえ改宗すれば領民の改宗は容易で、このことは集團改宗により明らかである。

二 領主は所領内の港にポルトガル船の來航を熱望している。それは莫大な富をもたらすからである。

三 ルイス・アルメイダ修道士が<sup>(1)</sup>イエズス会に入るまでは、迫害や物資不足に耐えて清貧の生活がつづけられていたが、彼が五千クルサードをもって入会して以後、生活が贅沢になり、規則がゆるんだしまった。

四 五千クルサードはマカオ貿易に投資され、この七、八年来、貿易の利益によって絹ものをつかうようになり、食料にも恵まれ、召使いをつかい、布教に熱意が失なわれている。

五 このことがインド管区長の耳に入り、絹の使用禁止とマカオ貿易は最少限度とすることをいつてきている。

以上のようないきさつから、カプラル神父は、イエズス会の修道精神を回復するため、コレジオの設立が必要である、とした。

彼の構想は、コレジオには新たにインドから神父・修道士を派遣してもらい、五、六名の人員構成で服従と清貧の生活をさせ、再教育を行なう、とするものであった。

アルメイダ修道士の創意と資金によるマカオ貿易は、日本イエズス会の必要経費をまかなうためにはかかせない施策であつて、宣教師の多数意見は、カプラル神父の見解に反対であつた。のちに巡察師ヴァリニャーノはマカオ長官と契約を結び、マカオ貿易は制度化されることになる。しかしそのことによつてイエズス会は非難を浴びることもなるのであつた。そして八年、日本からのいわゆる天正使節がローマ教皇に謁見した際、それまで公認されていたイエズス会の貿易参加は取り消され、代つて助成金が交付されることになる。

カプラル神父の手紙が送られて二年後の一五七三(元龜四)年は、マカオ貿易が大打撃をうけ、従つてイエズス会の財政が危機にひんした年であつた。

この年マカオからの定航船は、荷物の積み過ぎで帆走が思うにまかせず、天草沖にさしかかつたところで台風にあい、遭難した。その結果二人のアラブ人が生き残つただけで、イエズス会にとつて貴重な人命と積荷とが失なわれた。

遭難者のなかには、巡察師のゴンサロ・アルヴァレス神父をふくめて五名の神父がおり、カプラル神父は、日本布教長としてすでに三年を経過しているところから、交替できるものとおもっていたが、この事故のために立ち消えとなつてしまつたのである。

なおこのとき、義鎮(宗麟)が待ち望んでいた大砲が失なわれた。はじめのものはマラツカ沖で失なわれていたから、これは二度目のものであるつた。

翌七四年三月、カプラル神父はインド管区長宛の手紙で、コレジオのために経験豊かな神父数名と、日本語を学ばせるために若い修道士数名を至急派遣するよう要請した。これはさきの海難事故のため、予定されていた宣教師の増員ができなかったためのものであることはいうまでもないが、日本人のイエズス会への入会問題をとりあげていることに注目すべきであろう。このことについて、彼は消極的であったからである。

カプラル神父によると、日本人の同宿（ソトウキ）が説教を手伝っており、信徒ではあるもののイエズス会士ではないために、その行動には問題があり、教会から離なれようとおもえばいつでもそれができる。しかし日本語の説教者がいなければ、大規模な布教はできないから、いきおいかれらをイエズス会に入会させることが必要になってくる。その結果、同宿として働いていたロケ修道士ほか四名の日本人がはじめて入会を許されたのである。

これよりさき、フランシスコ・ザビエル師の来日のときから、日本語習得の問題については必要な配慮がなされていた。すなわち、ザビエル師に同行したファン・フェルナンデス修道士、また五二年来日のバルタザール・ガゴ神父に同行のデュアルテ・ダ・シルヴァ修道士、五六年来日のヌーネス・バレット神父がつれてきた五人の孤児などがそれであった。これらのひとびとはいずれも日本語習得の特命をうけ、とくに孤児たちは大人より言葉をおぼえるのが早いからということで送られたのである。しかし宣教師たちの日本語習得は遅々として進まなかった。七九年に来日した巡察師は、このことをはじめて知り、愕然とさせられたのであった。

さて七四(天正二)年はイエズス会にとって重要な年であった。というのはこの年から翌年にかけて、大村領で集団改宗がおこなわれたからである。

領主の大村純忠(ドン・バルトロメオ)はすでに六三(永禄六)年六月に改宗していたが、仏僧の反対により謀反のおこることをおそれ、所領内にキリスト教をいれることは見合わせていた。ところが七四(天正二)年三月、諫早氏が大村領に進攻するという事件がおこった。その目的は長崎の奪取であった。しかし長崎はマカオ貿易のターミナルとして四年目で、国内の各地から

商人が集まって発展の途上にあり、この港は万難を排して死守しなければならなかった。そこで在泊中のポルトガル船四隻の助けを借りることになり、ようやく諫早氏を撃退することができたのである。

この事件を契機として、純忠は、キリスト教の領内布教にふみきり、仏僧たちをふくめ、改宗者は二万人に達したのであった。

この集団改宗にあたり、当時五畿内にいたカブラル神父は一端豊後に帰ったのち、肥前地方の神父・修道士を総動員して布教に奔走したのである。このようにカブラル神父は多忙をきわめていたが、宗麟によって豊後によびもどされ、次男親家（ド・セバステアン）に授洗する。そしてこれ以後、豊後のキリスト教化が大きく進展することになる。

このような大規模な改宗は、それまで経験しなかったことであり、そのため宣教師の不足はいよいよ深刻なものとなった。そこで急拠ロペス神父をインドに送って神父・修道士の派遣を求めたのである。ロペス神父は七十六年四月ゴアに到着、巡察師に日本の布教状況について報告し、ペトロ・ラモン神父をふくむ十三名のイエズス会士とともに、翌七十七年七月長崎に帰ってきた。ラモン神父はゴアで修練長をつとめており、修道士のうち五名は修練院の学生であった。

なお七十六年にはインドから三名の神父が日本に到着したが、巡察師から、日本でコレジオと修練院を開設することについての問題が提起されていた。そこでカブラル神父は、大村と有馬で働いている神父・修道士の出席を求め、口ノ津で協議会を開いたのである。

巡察師の質問事項と回答はつぎのとおりであった。

一、どのような型のコレジオを設置すべきか。所要経費一切をイエズス会が負担するものか、それとも施しものに依存するか。カサ・プロフェツサ（誓願修士の修院）とすべきか。

答 少くとも下地区しもにおいては施しものは期待できない。領主は広大な土地を所有しているが、自分に必要とするもの以上を得ておらず、豊後国王（義鎮）のように富裕な領主は例外である。コレジオは修道精神を維持し、布教をすすめるた

めには不可欠である。

二 修練院を設置すべきか。また修練院での教育は、古典・倫理神学から始めるべきか。

答 ヨーロッパ人は数年間日本語を学んだのち、ようやく異教徒に説教ができるようになる。フロイス神父（当時都地区の布教長で、協議会には参加していない）は十三年間日本語を学び、日本語の知識に精通しているが、異教徒に対しては敢て話しかけようとしないうし、キリシタンに話しかけるときにも大変努力している。

日本人のなかにはロレンソやマチアスのようにすぐれた修道士がいるので、今後多くの日本人がイエズス会への入会を許され、修練を積むことが望ましい。従って修練院を設置すべきである。

三 コレジオおよび修練院の設置場所如何。

答 マカオは支那官憲にとりかこまれ、海賊の脅威にさられているばかりでなく、住民は強慾で放蕩三昧である。これに反して日本では何らの不安もなく、特に豊後国王のもとでは強力な保護がある。コレジオでは日本語、日本の文学や宗教その他日本の事物を学ぶべきで、そのためには改宗した仏僧たちを教師としてつかうことができる。さらにラテン語・哲学などを教科にとり入れれば、キリスト教に対する評価が大きく高められる。目下改宗事業で多忙を極めているので、設置場所の決定は巡察師にゆだねたい。

四 コレジオの経費として、ポルトガル国王からの下賜金年額千クルサードで維持できるか。

答 コレジオの経費だけでなく、教会を建て、使用人に給料を払い、キリシタンおよび非キリシタンの領主たちに進物をおくり、改宗者に生活の援助をしてやり、宣教師たちの旅費をふくめると大きな額になる。

当面教会や住院をたてるための費用として一万クルサード、また宣教師団の費用として年額五千クルサードが必要である。従ってマカオ貿易をイエズス会において制度化し、その収益を経費にあてるべきである。

以上にみるように、この協議会でコレジオと修練院の基本的な方向が定められており、特に注目すべきことは日本人をイエ

ズス会に受け入れることと在日イエズス会の財政問題である。いずれも巡察師の解決すべきことがらであり、彼の来日が一日千秋の思いで待たれていた。

巡察師ヴァリニャーノの足どりをたどってみると、ゴアを出帆したのが七十七年九月で、途中マラツカで十か月、マカオで十か月滞在ののち、日本に到着したのは七十九年七月であった。当時豊後では大友氏の日向敗退後、不穏な状況がつづいていたが、それもおさまり、臼杵で宗麟に会うことができたのは翌八〇年十月四日(天正八年八月二十六日)のことであった。そして巡察師は宗麟から重要なアドヴァイスを受けたのである。

ここで七十七年の日本の布教状況について、インド管区年報(一五七八年)を要約するとつぎのようになっている。

現在日本にはイエズス会士四十六名がおり、そのうち神父が二十三名、修道士が二十三名である。コレジオも修練院も設置されていないが、全員がその設置を熱望している。……豊後国王からこれら教育機関のために用地を与えられており、その場所は、国王の御殿に隣接したところで、海に近く快適で便利もよく、周囲が半レグア(一レグアは五キロメートル)ある。

上長であるカブラル神父は修練院の院長にペドロ・ラモン神父をあて、フロイス神父を日本語の教師とし、十四名の神父・修道士がコレジオ設立のために働いている。

この年報からみると、修練院はペドロ・ラモン神父が修練生をつれて臼杵にやってきましたときには、非公式ではあるが修練を始めていたのである。非公式というのは、修練院設立は総会長の権限であり、それは総会長代行の巡察師に与えられており、日本布教長には与えられてはいないからである。

修練院の場所は、現在の畳屋町、唐人町の一帯ではなかったろうか。臼杵川川口の右岸で、敷地の周囲半レグア(一レグアは五キロメートル)というのを面積に換算してみると、十一万坪位になるから、修練院ばかりでなくコレジオを置いても充分であ

る。カブラル神父の構想では修練院とコレジオを同一敷地内におくこととしていたのではあるまいか。しかし巡察師が宗麟に会って以後、コレジオは府内(大分市)におくことに決定された。

なお七七年一月には都からフロイス神父が養方パウロを同伴して豊後についた。養方パウロはこのときすでに六十九歳と高齢であったが、日本の古典と仏教の諸宗派に精通しており、説教と教理教育に非常にすぐれていた。

彼は若狭(福井県)出身の医者であったとされているが、もともとは仏僧であったのかも知れない。六〇年に都でヴィレラ神父によって洗礼を受けたのち、住院で同宿として働き、ヴィレラ神父のあとをついだフロイス神父にその学識を認められて、

豊後に設立された教育機関で日本語の指導に当り八〇年秋には巡察師によってイエズス会に受け入れられた。

養方パウロによって、イエズス会士たちに対する日本語教育が制度化され、ようやく軌道にのったのである。

注(1) ルイス・アルメイダ修道士はユダヤ系のポルトガル人、一五二五年リスボンの生れ。外科医であり、貿易に従事していたが、五六年日本でイエズス会に入会。府内では乳児院・病院をつくり医師の養成に当たったが、六〇年頃からイエズス会の命令により医療の第一線から退いた。なお六三年にはミゲル・ヴァス修道士がプロクラドール(会計係)となつているので、アルメイダ修道士がマカオ貿易にあつた期間は六、七年間ではなかつたらうか。

(2) 同宿とは「寺の内において、坊主に仕える若者又は剃髪した人」(『邦訳日葡辞書』)。巡察師ヴァリニアノは「当初から今日に至るまで日本人修道士の数は不足しており、言語や風習は我等にとつて、はなはだ困難、かつ新奇であるから、これらの同宿がいなければ、我等は日本で何事もなし得なかつたであらう。」とのべている(『日本巡察記』)。

(3) 一五六一年十二月一日付ゴア発ルイス・フロイス神父からルシタニア宛の手紙に「都で布教に当っているガスパル・ヴィレラ神父は、尊敬されている仏僧五〇人を改宗させた」とある。

## 二 巡察師ヴァリニャーノ神父の方針

巡察師ヴァリニャーノ神父は、一五七四(天正二)年三月、インド派遣の大宣教師団四十一名をつれてリスボンを出帆、この年の九月にゴアに到着した。そしてゴアを中心とする布教地の巡察をおえたのち、七五年十二月六日から十八日にかけて諮問会議を開いた。

会議出席者は、巡察師、管区長をはじめとしてコレジオおよび修練院の上長など十六名で、そのなかには当時修練長であったペドロ・ラモン神父、日本で八年間布教にあたっていたバルタザール・ガゴ神父も特別参加としてふくまれていた。<sup>(1)</sup>

会議での諮問事項は五十七項目に及び、そのうちの第四十四項目に、マラッカ、支那又は日本にコレジオ設立の件がとりあげられた。<sup>(2)</sup> 以下はその審議の要約である。

一 巡察師はこれらの土地を見ていないので、この段階では設立場所をきめられない。従ってその決定については巡察師に一任する。

二 マラッカに大きなコレジオを設立することは不適當である。その理由は①マラッカは場所がせまく、多くの商人たちが交易のため往来しているが、ポルトガル人は二百人以下である。②イエズス会以外の修道会は来ていない。③非常に暑いところで、諸物資は外から運び込まねばならない。④対岸のスマトラからの攻撃がたえず、政情不安である。⑤哲学・神学の教育はゴアでやればよい。⑥マラッカは赤道無風帯にあり、九百レグアも離れたところから日本人を受け入れることは、気候が大きくちがうので無理である。以上のようなことから、コレジオを設立するとしても小規模のもので十分である。

三 支那にコレジオを設立するときは、古典・倫理神学を教える。またこのコレジオに修練院を併設し、日本人を受け入れる。



四 日本では戦乱がつづいているため、カサ・プロフェッサムもコレジオも設立されていないが、日本語を習得させるため、セミナリオ(神学校)を設立すべきである。

以上みるように、コレジオの設立場所として先ずマラッカが候補地として検討されたが、この案は、ポルトガル国王から巡察師に対して、同地に六十人ないし七十人収容のできる大型のコレジオを設立するよう命令されていたからである。マラッカはガンジスの外側にあり、東洋貿易の中心地であるから、マラッカのコレジオは、マルコ(モルッカ諸島)、支那および日本に、以後設けられるコレジオの頭となるべきである、というのがその根拠であった。しかしこの案は、国王の命令にもかかわらずとりあげられなかった。その理由はすでにのべたとおりである。

なお巡察師がポルトガル国王に謁見のとき、日本のコレジオのために、干デユカードの年金が下賜された。(4)

巡察師は諮問会議ののち、七六年一月からチョール・バセインなどゴア北方の布教地に出かけ、四月にゴアに帰着した。頂度そのとき、日本から派遣されたロペス神父がゴアに帰ってきていた。巡察師は二か年間日本からの通信をえていなかったから、このときようやく、日本についての最も新らしく、また詳しい報告をうけることができ、ペドロ・ラモン神父らの派遣となったのである。

翌七七年も巡察がつづけられ、日本へ向けてゴアを出帆したのはこの年の九月のことであった。

巡察師は日本への途中、マラッカで「インド巡察記」(スマリオ・インディコ)を執筆、マカオでは貿易協定を締結したのち、季節風をまわって出帆、口ノ津に入港したのは七九(天正九)年七月二十五日であった。彼が日本上陸の際に最も期待し、また関心があったのは、イエズス会士たちの日本語がどこまで進んでいるか、ということであった。

巡察師が口ノ津について約五か月後、十二月中旬現在の在日イエズス会士名簿が作成されており、巡察師を除き総員五十五名、そのうちには日本人修道士七名がふくまれている。(6)

この名簿の特長は、全日本布教長のカブラル神父以下の神父・修道士について在日年数と日本語をどの程度知っているか、その理解度について評価していることである。巡察師はもとより日本語を知らないから、恐らくフロイス神父による評価とみるべきであろう。

彼はさきにもふれたように、日本語教師の地位にあったからである。

まず神父二十一名(巡察師と秘書ロレンツ・メシア神父を除く)についてみると、理解度によって四つに分類することができるであろう。なお括弧内は在日年数である。

A 1 ルイス・フロイス神父(十六、七年)

2 ベルヒオール・デ・フィゲイレド神父(十五年)

3 バスチアン・ゴンサルヴェス神父(九年)

4 アントニオ・ロペス神父(三年)

B 1 バルテザール・ロペス神父(十年)

2 ジョアン・フランシスコ神父(六年)

3 クリストヴァン・デ・レオン神父(三年)

4 アロンソ・ゴンサレス神父(三年)

5 ベルヒオール・デ・モラー神父(二年)

6 グレゴリオ・デ・セスペデス神父(二年)

7 ゴンサロ・ラベロ神父(二年)

C 1 コランシスコ・カブラル神父(十年)

## 2 オルガンチーノ神父(十年)

3 ジョヴァンニ・パチスタ神父(十八年)

D 1 ガスパル・コエリヨ神父(九年)

2 ペドロ・ラモン神父(二年)

3 バルテザール・ロベス神父(小)(二年)

4 アントニーノ神父(一年)

5 フーラネットイ神父(一年)

6 アフォンソ・デルセナ神父(一年)

7 ジュリオ・ピアーニ神父(一年)

この分類でA・Bクラスの十一名がまず合格というところであろうか。Bクラスにはセスペデス神父<sup>(7)</sup>ら<sup>(7)</sup>在日二年という短い期間で、一応合格とされる神父三名がいた。このことから巡察師は、日本語の習得は二か年で足りるとし、修練期間を二か年とせめたのである。なおC・Dクラスにカブラル、オルガンチーノ、コエリヨ神父など、各地区の布教長で、在日年数の長い上長の名がみえる。このことは「日本語を学ぶように」と指示をし、またそのための要員まで派遣してきた巡察師にとって大きな驚きであった。この問題はとりもなおさず、布教方針についてのカブラル神父との見解の相違ということに帰着するが、このことについてはさきで述べることにしたい。

なおオルガンチーノ神父がどうしてこのように低く評価されているのか。彼は都地区で「うるがんさま」と多くの人に親しまれ、人気最高の人であったし、フロイス神父とは六年間も一緒に働き、彼の後任として地区長になった人であるだけに、納得できかねることである。

つぎに修道士についてみると(括弧内は在日年数)、アルメイダ(二十二年)、アイレス・サンチェス(十七年)、ミゲル・ヴァス

(十五年)、ギユリエルメ(十四年)、アンブロシオ・デ・バイロス(五年)たちは、いずれも「日本語を話すのがきれいとはいえない」となっている。おそらく、これら修道士たちが働いていた豊後や肥前の方言でなら話すことができる、という意味であろう。なおラグーナ、カリオンの両修道士は来日二年であったが、「どうにか告白をきくことができる程度に日本語を理解している」となっている。その他の修道士たちは日本語文法を勉強中であった。

なおこの名簿には七名の日本人修道士の名が見えるので、イエズス会歴の長い三名についてふれておきたい。

ロレンソ修道士 一五二六(大永六)年肥前国白石の生れで琵琶法師。五一年山口でザビエル師によって受洗。最初は同宿として働き、六〇年ごろイエズス会に入会、六九年には信長の面前で日乗と宗論をたたかわしたほどの説教家であった。ポルトガル語もラテン語も話せなかった。

ジョアン修道士 一五五〇(天文一九)年山口の生れで、乳呑み児のときからトルレス神父に育てられ、同宿として働き、六九年にイエズス会に入会、説教や教理教育に従事し、ポルトガル語に堪能なただひとりの日本人修道士であった。主に修練院やコレジオの日本語教師として活躍した。

カブラル神父によると「私は彼(ジョアン)を説教や通訳につかってきたが、私が日本語を学ぶまでは、異教徒のなかにいるときはまるで親分気取りで、私はひたすら我慢をするほかなかった」。

このような経験があったからか、日本人にはラテン語もポルトガル語も教えてはならない、とした。これでは神父への道がとぎされてしまうことになる。

ダミアン修道士 一五三八(天文七)年ごろ筑前秋月の生れで武家の出身。五六年ごろから同宿として働き、ヴィレラ神父やロレンソとともに都での布教にあたり、六八年にはイエズス会に入って修道士となった。

同じ秋月出身で博多で大きな商取引をやっていた古いキリシタンのコスメ・コーゼンと親交があり、七一年には博多に

立派な教会が建てられた。この教会ではフィゲイレド神父とともに働いていたが、その後自分の意思で退会、七六年には再び入会を許された。再入会は、その前年に大友親家が受洗したことから関係があるのではなからうか。

ダミアンは出自から、武家としての教養があり、茶の湯者であった。宗麟は彼を信頼していたので、イエズス会内部の情報、彼によって伝えられたものとおもわれる。

カブラル神父はダミアン修道士について「彼はフィゲイレド神父と一緒にいたことがあり、私とも一緒にいたことがあ  
るが、日本語の教養があり、慎重で我慢強い男であった。しかし博多にいるときイエズス会から身をひき、異教徒の殿  
(秋月種実か)に仕えていたので、私はその地(秋月)をまわっているとき、彼を教会に引き戻したことがあった」。

このようなことから、カブラル神父は、武家出身の教養人であっても日本人は信用できない、としたのであろうが、ダ  
ミアンにしてみれば、日本人に対する差別的処遇にたえられず、退会を余儀なくされたのではあるまいか。

以上のほか、コスモ、ロケ、パウロ、マテウスの四名の修道士の名があげられており、いずれもイエズス会在会三年で、説  
教師であった。ジョアン修道士だけが上手にポルトガル語の読み書きができ、そのほかの者は、日本語のほかは話すことも理  
解することもできなかった。いずれもイエズス会在会三年というのは、肥前や豊後での教勢が急進展をみたときと一致する。  
当時キリシタンの数は十万人にのぼり、これに対するイエズス会士は五十五名にすぎず、キリシタンの大幅な急増は、イエズ  
ス会の背負いきれない程の重荷となり、日本人を聖職者として登用すること以外に打開の方法がなかった。しかしこのことは  
カブラル神父の「日本人修道士は七、八人程度におさえる」とする方針に対し、抜本的な改革をせまるものであった。

このようないきさつから、巡察師のとった対策は、日本人を聖職者に登用するためのセミナリオ(神学校)の設立であった。  
セミナリオの主要教科はラテン語であり、ラテン語によって哲学・神学を学び、神父への道が開かれてくる。巡察師は、日  
本での布教事業の基礎に、この神学校をおいたのである。

注(1) ガゴ神父は、一五五二(天文二二)年日本に着き、約八年間働いたのち、六〇(永禄三)年に豊後をはなれ、インドに戻った。ザヒエル師が義鎮に謁見し、インドに帰ったのち、府内での布教を許可され、博多でも布教にあたった。日本を離れたときは三十八歳とまだ若かったが病氣勝ちであった。インドではゴア周辺で病氣治療にあたっていた。会議出席者のなかでは日本を知る唯一の人。

(2) 一五七五年十二月六日から十八日の間、インド管区諮問事項に対する意見の陳述。

(3) インド管区はガンヂス河を境にして、ベルガル湾およびアラビア海沿岸地方がガンヂスの内側。

(4) 一五七三年十二月三十一日 アルメイリン エロニモ・コッタ神父からイエズス会総会長エヴェラルド・メルキュリアン宛

(5) 「モヌメンタ・ヒストリカ・ヤポニアエ」(『大分県地方史』第一〇三号)

(6) 日本人修道士に養方パウロがふくまれていない。彼がイエズス会に受け入れられたのは、巡察師が豊後を訪れた八〇年十月ごろか。

(7) 一五七七年に來日、八一年には臼杵から都に出、八六年副管区长コエリヨ神父が高山右近の立会いで秀吉に謁見のとき通訳をつとめ、

八七年細川夫人に授洗(ガラシア)、九四年には朝鮮の小西行長を訪ね、関ヶ原の戦い以後、細川忠興の中津、ついで小倉に移り、一六一年小倉で死去。日本語に傑出し交際に巧みであった。

### 三 教育 機 関

一五八〇(天正八)年七月、下地区しもにいた巡察師のもとに、インドでの諮問会議に対する総会長の返事がとどいた。そのなかで総会長は、日本人のイエズス会入会問題とセミナリオ・修練院・コレジオの設立については巡察師に判断を一任していた。

この返事をうけて、巡察師はカブラル、コエリヨの両神父、秘書メシア神父、アルメイダ修道士と長崎で予備的な協議を行なった。この協議会では十二項目がとりあげられたが、そのうち教育機関についてはつぎのような発言があった。

一 日本人のための神学校(セミナリオ)設立については全員同意。出来うれば三地区それぞれに設立すること。入学資格は十五歳以上とすること(カブラル)。他の神父は、年令よりも重要な事由があれば十五歳以下でも認める、とした。

二 日本人神父養成の件は在日イエズス会にとって根本的問題である。ラテン語・哲学・神学のすべての必須教科を教えるべきかについて、ラテン語については全員同意。他の教科については反対(カブラル、アルメイダ)。

三 日本人のイエズス会受け入れについては入会・学問・敘任の三つのテーマについて論議したが意見が分かれた。

四 日本人同宿をポルトガル人と同等に取扱うべきか。日本人に対しては寛容であってはならず、きびしく扱うべきである(カブラル)。他の神父たちはこの意見に反対、ポルトガル人同様、愛情をもって親切に扱い、必要な場合にはきびしくすべきである。

巡察師はこれらの意見に耳をかたむけながら、問題解決の方向が見出せず、さらに他の神父の意見をきくことにして臼杵、安土、長崎の三地区で協議会を開くことにした。

下地区での協議会のうち、巡察師は、天正八年八月六日豊後に到着、同月二十六日宗麟に迎えられ、数回にわたって両者の会談がおこなわれた。会談はカブラル神父と彼の布教方針に対する批判に終始したものとおもわれる。このとき巡察師は、カブラル神父の独断と偏見による統轄が、在日イエズス会を危機的な状況に追い込んでいることをはっきりと教えられたのであった。そしてその後の臼杵協議会において、日本人を積極的にイエズス会に受け入れること、そのために教育機関を設立することが決断されたのである。

## セミナリオ

有馬セミナリオは、一五八〇(天正八)年四月から建設がはじめられた。その敷地は、この年三月末に受洗した有馬晴信(ドン・プロタジオ)から与えられたもので、敷地内に寺があり、これをセミナリオに転用するため改築し、また建て増しもおこなわ

れて、十月には三十人を収容できるようになった。建物には教室用の大広間がつくられた。前面には運動場ができ、別にリクリエーションのための別荘があった。

専任職員にはジョアン・デ・ミランとアンブロシオ・ダ・クルスの両修道士のほか日本語教師のジョルジ修道士、そのほか使用人がいた。

セミノリオへの入学は、生涯、教会に奉仕するという両親の誓約がある貴人(武家)の子弟のみに許可された。当初二十二名が入学したが、四十ないし五十名の収容を予定していた。

日課表をみると、起床は夏四時三十分、冬はその一時間おくれで、就寝は八時。毎日の授業はラテン語・日本語がそれぞれ四時間で、土曜日は午前中ラテン語の復習、一時以後授業はなく、夕食後二時間日本語の読み書きを復習、また毎日一時間聖歌・聖楽の練習がおこなわれた。

生徒は剃髪。室内では帷子(かたびら)(ひとえ物)、室外では道服(羽織)を着用、親戚が面会に訪ねてきたときには絹ものを着ることとされた。

食事は朝夕の二回で、米飯に一汁一菜であるが、日曜とか祝日にはご馳走や菓物がついた。入浴は、夏は毎週、冬は二週間に一回であったが、川や海での水浴は自由であった。

暑中には数日間の休暇が与えられ、両親の病氣その他緊急な場合には帰宅が許された。

安土セミノリオは、八〇年五月に、その敷地を織田信長からオルガンチーノ神父が受けとり、建物用の材料を準備していたので、すぐに工事にとりかかり、間もなく、純和風の三階建の建物が完成した。信長は自分の居城と安土の城下町をできるだけ立派なものとすることを望み、セミノリオの建物についても格別の関心を示し、建築経費として補助金を贈り、安土城と同じ青色の瓦で屋根を葺くことを許した。



専任職員は、シメアン・デ・アルメイダとディエゴ・ペライラの両修道士および日本語教師のヴィセンテ修道士の三名であった。

開校当初の生徒数は二十二名で、その後数名の増加がみられ、いづれも有馬の場合同様貴人の子弟で、高山右近のところからは八名が入学、そのうちのひとりには後に殉教して日本二十六聖人のひとりとなった若き日の三木パウロであった。

安土セミナリオは二年間続いたが、本能寺の変のち高槻に、ついで大坂に移転した。

下地区の有馬、都地区の安土とならんで豊後地区にも成人向きのセミナリオの設立計画があつたが、これは実現しなかつた。その理由は、おそらく財政の見通しが立たなかつたからではなからうか。というのはセミナリオ三か所の経費は三千クルサードに達し、イエズス会総経費の四分の一を占めていたからである。

セミナリオの教育理念は、日本文化とキリスト教的ヒューマニズムの融合をその基調とする人間尊重の精神であつた。

巡察師は上陸のときから、ヨーロッパ人宣教師と日本人修道士や同宿との関係が異常に見え、日本語習得が予想した程進んでいないのは、両者の間の不仲に根本的原因があるとした。事実、日本人修道士たちは、カブラル神父の「鉄のむちと乱暴な言葉によって」召使いのような取扱いをうけていた。そこで巡察師は、日本人をヨーロッパ人と同様に処遇し、日本の土地で日本人を無視したのでは、イエズス会は存続しえないという方針をかためたのである。

## 修 練 院

修練院は、一五八〇(天正八)年十二月二十四日、白杵に設立された。修練生は十二名で、そのうち六名が日本人で、他の六名はポルトガル人であつた。巡察師は、修練の精神に添って、克己とイエズス会の精神に徹するよう、都へ出発するまでの二

か月間、毎日、修練生たちに訓話した。院長にペドロ・ラモン神父が任命され、ガスパル・マルチンス修道士が補佐にあたった。

ラモン神父はスペイン人で、一五五〇年の生れ、ローマで学問を修めたのち、二十三歳のとき司祭となり、七四年巡察師らの宣教師団に加えられてインドに渡った。インドでは修練長、修練院長をつとめ、七七年七月日本に到着した。その後二年間は府内におり、修練院発足のときには臼杵にきていた。臼杵では八七年島津氏の豊後進攻のときまで院長をつとめ、臼杵から引き払ったのちも、肥前の各地を修練院とともに転々と移動した。そして九五年病氣のためマカオに帰り、五年後再び来日、黒田孝高よしかたの博多で十年間働き、孝高の葬儀を執行、一六一一年長崎で死去した。

臼杵修練院長のとき、志賀親次(3)(パウロ)の招待を受けて、その妻に授洗(マグダレナ)、このとき四十日間志賀(3)に滞在して千人以上に授洗した。

なお一五九三年一月の在日イエズス会士名簿によると、彼は「日本語に熟達しており、日本語で説教ができる」とある。このような評価は、他の宣教師にはみられないから、日本語が最もよくわかり、さらには日本人と日本文化に明るかったこととおもわれる。

ついで修練生についてみよう。

さきにもふれたように、設立の際には日本人、ポルトガル人はそれぞれ六名の同数であったが、翌八一年十二月には日本人六名、ポルトガル人五名。八二年二月には日本人六名、ポルトガル人四名。そして八三年冬にはセミナリオを修了した神学生が入ってきたので日本人は十名、ポルトガル人は三名となった。

このときから、日本人聖職者を養成するための、セミナリオから修練院への一貫した教育体制が軌道に乗ったわけである。

八六年秋の名簿を見ると修練生十二名はすべて日本人で、大坂のセミナリオ出身者が六名、有馬セミナリオから四名、豊後から二名の名が見える。豊後からの二名はこの年の八月にイエズス会に入会を許されたばかりのマテウスとシメオンであっ

た。

なお修練院は臼杵から撤退したのち、八八年には有馬セミナリオと合併したが、このときの名簿を見ると修練生は二十三名、うち二名がポルトガル人となっている。おそらく臼杵修練院の最後の顔振れと同じではなかるうか。日本人修練生を出身地別にみると、山城七名、肥前七名、豊後三名、日向二名、筑前一名、肥後一名で、年令別では十九歳二名、二十歳代十六名、三十歳代二名のほか、六十三歳と高齢のアダムがいた。

修練院は、有馬以後加津佐、八良尾、有家、長崎、天草、長崎、有馬、長崎と場所をかえ、一六一四(慶長一九)年宣教師の国外追放によってその歴史を閉じたのである。

## コ レ ジ オ

臼杵の修練院と同時に、府内(大分市)のコレジオが発足した。<sup>(4)</sup> 当時府内の住民は八千人で、義統が統治、キリシタンは三、四百人であった。場所が狭まかったので、移転を希望していたが十三名のイエズス会士がいた。そのうち七、八名は古典を学び、ついで哲学の聴講を始めていた。

発足のときの院長はフィゲイレド神父で、プレネステイノ神父が古典と哲学を教授し、日本語の指導には養方パウロ修士があたった。学生五名は全部ポルトガル人で、いずれも修練を終った人たちであった。他に三名の修道士を加え、八一(天正九)年十二月現在、コレジオの人員は十一名であった。

翌八二年には、カブラル神父のあとをついだコエリヨ神父がコレジオに入り、また教授陣にフロイス、ペドロ・ゴメス、カルヴァリヤール、カルデロンの各神父が加わり、学生も七名となって、人員は十七名となった。

ペドロ・ゴメス神父はスペイン人で一五三二年の生れ、五三年にイエズス会に入り、ポルトガルのコインブラ大学で約十年間にわたり哲学・神学の教授をつとめた。コインブラ大学はイエズス会士養成のための教育機関でもあったから、当時最高の神学者が府内のコレジオで働いていたということになる。

ゴメス神父は府内のコレジオで、日本人神学生のために教理要綱(コンペンディオ)を編さんし、これは教科書としてつかわれた。また九四年の年報、九七(慶長二)年の殉教報告、九八年の意見書をかいている。

なお布教関係では、志賀太郎(ドン・パウロ)、田原親盛(パンタリアン)の妻(マルタ)、宗麟の娘(マセンシア)に授洗したほか、八年四月二十七日(天正一五年三月二十日)、義統(コンスタンチーン)に授洗した。義統の受洗は黒田如水のすすめによるもので、このとき同時に妙見城(宇佐郡院内町)で、義統の重臣宗像・本庄・臼杵・志賀の諸將たちも受洗した。

ついで八三年の名簿によると、コレジオの職員は、豊後地区上長のゴメス神父以下六名で、プレネステイノ神父は引続き哲学を担当し、新たにコインブラ大学出身のセバスチアン・ゴンサルヴェス神父が古典の指導にあたった。このときの学生は古典科十名、哲学科六名の合計十六名であった。

八六年の名簿によると、コレジオの職員は、ゴメス神父以下六名で、プレネステイノ神父に代ってカルデロン神父が哲学を担当し、日本についたばかりのフルビオ・グレゴリオ神父が市民法・教会法の指導をした。

この年の学生は十四名で、そのなかにシモン、ペドロの日本人の名がみえる。また七七年に來日のうち、臼杵修練院を経て府内コレジオに進学したミゲル・ソアレス修道士は、最終の神学課程で学んでいた。

府内のコレジオも臼杵の修練院同様、天正十四年の島津氏の豊後侵攻のため肥前へと撤退するが、八九(天正一七)年有家にあったときの名簿をみると、院長はカルデロン神父、神学教授はフランシスコ・ペレス神父であった。このときの学生は二十名で、そのうち日本人は十六名を占め、豊後出身のバスチアン、シメアン、マテウスの三人の名がみえる。

九三年の名簿ではマテウス修道士はラテン語初級の学生で、同じクラスに伊東マンシヨと弟のジュスト、千々岩ミゲルがお

り、中浦ジュリアンは二級、原マルチノだけがラテン語を修了して日本の古典に進んでいた。

マンシヨ、ミゲル、ジュリアン、マルチノの四人は天正使節としてヨーロッパに派遣され、かの地の文化にふれた人たちがあつたが、ラテン語は苦手であつた。日本人学生はラテン語は二級どまりで、原マルチノは例外的によくできたのである。

この九三年にはマカオにコレジオが設立され、禁教令のため日本から追放されるようになったイエズス会士たちを収容していくが、日本のコレジオは長崎に存続し、一六一四(慶長一九)年の大追放によつて、三十余年の歴史を閉じたのである。

(1) 「うるう三月十六日から、菅屋九右衛門・堀久太郎・長谷川竹の三人を奉行として、安土城の南、新道の北に入江を掘らせ、田を埋

めて、その地を伴天連にお屋敷地として下された」(太田牛一『信長公記』卷十三)

(2) 「日本所在の各修院とその年間所要経費一覧表」(『大分県地方史』第一〇四号)

(3) 大野郡朝地町

(4) 設立場所は大分市顕徳町二丁目、デウス堂跡の石碑がある。

#### 引用文献

(1) ウイッキ神父編『ドクメンタ・インディカ』(ローマ イエズス会)

(2) シユッテ神父編『モヌメンタ・ヒストリカ・ヤポニアエ』(ローマ イエズス会)

(3) シユッテ神父著 コイン神父訳『ヴァリニャーノ宣教師団の対日布教方針』

(4) ヴァリニャーノ 松田毅一他訳『日本巡察記』(昭和五十三年 平凡社)

(5) フロイス 松田・川崎訳『日本史』第七卷(昭和五十三年 中央公論社)